

浄瑠璃に見る近世日本の身分感覚

神田 由 築*

はじめに

報告者はかつて、日本近世の身分感覚を読み解くうえで歌舞伎や浄瑠璃の作品が格好の資料であることを提言し、『双蝶蝶曲輪日記』という浄瑠璃作品にみる「身分感覚」を論じた⁽ⁱ⁾。そこでは、近年の日本近世史研究における「身分的周縁論」の成果をふまえて、「武士」と「町人」の中間的身分である「郷代官」という、18～19世紀に実在した社会的存在を前提とした、人びとの葛藤のドラマを跡づけた。「身分的周縁」とは、1970～80年代にかけての三つの研究の潮流—近世賤民制研究・朝幕関係研究・都市研究—が交錯するところに、いわゆる「土農工商」といった従来の身分制の枠組ではとらえきれない人びとの多様な営みを見出してきた、方法論でもあり対象そのものでもある⁽ⁱⁱ⁾。その拙稿では『双蝶蝶曲輪日記』の一部（通称「引窓」の段）しか取り上げなかったが、この作品には全編を通じて随所に、当時の人びとの身分に対する意識が見られる。いわば、近世の「身分感覚」や「身分的周縁」が、この作品の一つのテーマであるといっても過言ではない。

そこで、本報告では『双蝶蝶曲輪日記』の「引窓」以外の段を紹介しながら、そこにみられる近世の「身分感覚」について改めて考えてみたい。

1. 『双蝶蝶曲輪日記』

『双蝶蝶曲輪日記』（以下、『双蝶蝶』と略称）は、寛延2（1749）年7月に大坂の竹本座で、人形浄瑠璃芝居として初演された。作者は、二世竹田出雲・三好松洛・並木千柳。翌8月には京都の布袋屋梅之丞座で歌舞伎芝居として初演された。題名は、「長」の字をもつ二人の相撲取り（濡髪長五郎と放駒長吉）の名前にちなんでいる。彼らの生きざまに、二組の男女—山崎屋与五郎と吾妻、南与兵衛と都一—の話が絡む筋立てである。全九段の構成は以下の通りである⁽ⁱⁱⁱ⁾。

- 第一 浮瀬うかむせの居続けあいつに相図あいつの笛売り
- 第二 相撲すまうの花扇おやぼねに意見いけんの親骨
- 第三 揚屋町あげやまちの意気づくいけづくに小指こさきの身がはり
- 第四 大宝寺町たてひきの達引たてひきに兄弟あにいづのちなみ
- 第五 芝居裏けんくわの喧嘩なんぼに難波なんばのどろどろ
- 第六 橋本つじかこの辻駕籠あひごしに相輿あひごしの駆落かけおち
- 第七 道行菜種みちゆきの乱れ咲みだり
- 第八 八幡やはたの親里あひだに血筋あひだの引窓
- 第九 観心寺くわんしんじの隠れ家かくがに恋路こひぢのまぼろし

第二（通称「相撲場」）と第八（通称「引窓」）が人気で、今日でも歌舞伎や文楽（人形浄瑠璃）でたびたび上演されるほか、第四（通称「米屋」）と第六（通称「橋本」）も比較的上演される。本報告で紹介するのは、「相撲場」と「橋本」の段である。

*お茶の水女子大学大学院准教授

2. 「相撲場」の段

「相撲場」では、この作品の名前の由来ともなった二人の相撲取りの達引きが描かれる。濡髪長五郎は、その日、大坂堀江で行われた試合で、放駒長吉にわざと勝ちを譲る。それには理由があった。濡髪は山崎屋与五郎の父与次兵衛に恩を受けており、よって与五郎が新町の遊女吾妻を身請けできるよう、同じく吾妻を身請けしようとしている西国の武士・平岡郷左衛門に手を引いてもらうため、平岡が後押しする放駒長吉にわざと負け、その上で吾妻のことを頼んだのである。しかし、今日の試合で濡髪がわざと負けたと知った放駒は、かえってむきになり頼みを拒否する。

この話にみられる身分感覚は、相撲取の世界におけるそれである。まずは、身分に言及した箇所を引用しよう。

浜端へ、掛け出す茶店、札売り場。川は御座船いくなんざう幾何艘。木戸は大入り、明日御出の張り紙や、余る見物横町筋。竹の行馬やらいに立ち留り。編笠あみがさ着たる七賢人。残り多ときに寄り集り。なんときつい大入り。今の鯨波きの声が中入りさうな。どうでも濡髪勝ちますの。七日が間土付かず、三ヶの津の前髪。第一立身たちみ取り。(中略)と仕形話しかたばなしに連れの男。なんと大山と相引はどちらが強かるぞいの。いや今日は関せき同士取らぬげな。ア、どちらにやら痛みができた。その代りに。下の屋敷しもの抱かかへ相撲ずまう。濡髪ととらしてくれと。どれやら大身な侍衆の所望故しよもう。勧進元くわんじんもと、頭取方とうどりが濡髪へ段々の頼み故ぜひ。是非なう一番取るげなの。ヤこれは見たい、勝たしたい。

これは冒頭で、放駒が濡髪に勝負を挑んだことを見物人が噂する場面である。濡髪はすでに四季勧進相撲を行う相撲渡世集団（いわばプロの相撲取集団）のなかで、三都で一番との名声を確立している。それに対して放駒は、新参者ながら「下の屋敷の抱へ相撲」（すなわち、西国大名の抱え

ている相撲取）で、「どれやら大身な侍衆の所望」（どこやらの大身の侍衆が希望）したので、勧進元や頭取方が濡髪に口をきいて、今日の試合が調ったというのである。ところが実は、放駒は西国大名の抱えでも何でもなく、相撲場の堀江に程近い大宝寺町の米屋の倅だった。放駒が勝ったあとで、見物たちは、さすがが大名屋敷の抱え相撲と褒めそやすが、平岡郷左衛門と同僚の三原有右衛門は、放駒こと長吉の正体を知っている。

見物群集に打ち交じり、平岡郷左衛門、三原有右衛門。問屋の手代が御供にて、あとに付き添すまへがみふ角前髪は、大宝寺町の一番息子放駒の長吉。数多あまたの見物押し合ひへし合ひ。あれが屋敷の抱への相撲。よう関取さまあ。見事な勝ち（中略）

イヤこの郷左衛門が思ふつば。飛び入りといはば長五郎めが立ち合はぬは定の物。そこをぬからず町人の長吉を。抱への相撲放駒と偽り。名乗り上げたればこそ。今の相撲勝つたは手柄。

平岡は吾妻を身請けする景気を付けるため、放駒の身元を偽って相撲場に送り込み、与五郎が鼻舂する濡髪と対戦させたのである。ただ、その試合に放駒が勝ったのは、おそらく平岡としても計算外のことだったろう。

この「相撲場」で放駒は、濡髪にわざと勝ちを譲られるという屈辱を味わう。それは、背後に吾妻をめぐる平岡と与五郎の鞘当てが絡んでいるからである。濡髪も放駒も二人とも、真剣勝負をしたいという相撲取り本来の欲求とは別のところで動かざるをえない。それぞれに我が身がままならぬ立場にある。かつ、お互いに相手に相撲取としての興味もあるから、自分の加担する与五郎や平岡の背後に、濡髪なり放駒が付いていると聞けば、放つてもおけない。

とりわけ、負けるはずの試合に勝ってしまった放駒の憤懣はやるかたない。この場面を観る観客は、自然に放駒の悔しさを共有するようになる。

それは、こうした他人の事情に踊らされるという背景に加えて、彼自身の身分が他人によって偽装されている、その「身分感覚」の不安定さによるところも大きい。

近世の相撲取は、延享元（1744）年に四季勸進相撲の恒常的開催が幕府に公認されたことにより、渡世集団として社会的地位を確立することになった^(iv)。濡髪は、大坂相撲の頭取のもとに編成された相撲渡世の者と思われる。一方、大名屋敷に抱えられた相撲取は帯刀を許され、身分は「武士」とされた。その他は「浪人」身分の扱いであったが、放駒はそのいずれでもなく、町人身分ながらいわゆる素人相撲に参加する相撲取とみられる。大名抱えの相撲取とは格段の身分差があり、プロの相撲渡世集団に属する濡髪とも、渡世の世界における格式の差がある。そのことをよく知る近世の観客には、より放駒の切ない胸の内が迫ったに違いない。

しかし同時にまた、この段をより魅力的にしているのは、貫録も実力も濡髪より数段劣る町人の放駒が、相撲取の矜持においては一步も引かず濡髪と堂々と対峙する点である。そんな放駒の気性を、濡髪もよく理解している。この場面では意地を張り合い、後の「米屋」の段では喧嘩にも及ぶ二人だが、結局義兄弟の契りを結ぶに至るのである。

3. 「橋本」の段

与五郎の妻お照は、橋本（現在の京都府八幡市）の実家に呼び戻されてくる。そこへ与五郎も身請け話から逃れるために、吾妻と駕籠を二人乗りして駆け落ちしてくる。お照の父（すなわち与五郎の舅）治部右衛門は、二人を匿う代わりにお照への離縁状を書けと与五郎に迫る。ちょうどそこへ、息子がいるとも知らず、与五郎の父・与次兵衛がやって来て、嫁のお照を帰して欲しいと言う。治部右衛門は、与次兵衛が与五郎に身請けの金を渡

さなかったのを「我が子にさへ金銀を惜しみ、命^{しやうがい}生害に及ぶも構はぬやうな与次兵衛」と批判し、与次兵衛は治部右衛門が与五郎を匿ったことを「身上が気づかひで引き込んで無理暇取り、養ひを取るやうな聲をかへる思案ぢやの（財産が心配で無理矢理に離縁させ、聲を替えるつもりだな）」と言い返し、あげく以下のような言い合いになる（わかりやすくするために会話調に表示している）。

治部「黙れ、与次兵衛。太平の代^よにいらざる
武具^{ぶく}、馬具^{ばくう}売り代^{しろ}なしても、養はるゝ
治部右衛門ぢやないぞ。諸色^{しよしき}を買ひ込み、
値上げさせ。高利^{ひざほ}を貪り、人をひ
づめる。むさいきたない人非人と、こ
の治部右衛門が性根^{しやうね}は違ふぞ」

与次「イヤ人非人とは誰がこと」

治部「わごりよのことさ」

与次「しかとさうか」

治部「くどいくどい」

与次「くどくばかうぢや」

と与次兵衛が脇差を引き抜き打ち掛かるのを、治部右衛門は鏝で受ける。

この会話には、はからずも治部右衛門と与次兵衛の身分感覚が露呈している。治部右衛門の身分意識は「武士」である。橋本治部右衛門と名乗っているのも、もともと土地の土豪の家で、近世には郷代官（百姓身分ながら年貢徴収をはじめとする領主の農政の実務にたずさわりの、苗字帯刀を許された職分）を務めているのではないかと思われる（「引窓」の南方十次兵衛と同じ身分である）。彼は、与次兵衛が息子が苦境にあるのもかまわず、吾妻の身請けの金を出すのを惜しみ、はてはその嫁である自分の娘にまで嘆きを見せるという、与次兵衛のやり方が気に入らない。その批判の鋒先は、与次兵衛の「商人」根性に向かい、高利を貪る性根を「人非人」とまで罵る。このあたりの「武士」意識に裏打ちされた治部右衛門の言葉遣いも聞き所である。総じてこの「橋本」の段では、治部右衛門の「武士」身分感覚が顕著である。

こうしてあわやの場面となるところ、二人の間へ与五郎と吾妻を乗せてきた駕籠かきが割って入る。

中を押し割る息杖は、始終残らず立ち聞く甚兵衛。マ、マ、マ、まあ待たしやませ待たしやませ。待てとはおのれ何奴ぢや。誰であらうとも止める。思案あつて止める私ぢや。マ、マ、マ、マ、どつこいな。二人の刀を息杖で。下にしつかと押へ付け。さつきからの一部始終。お二人ながら腹の立つもお子達が可愛さもつともぢやもつともぢやもつともついでに止めるももつとも。ぢやと思うて聞いて下さりませ。

と、この駕籠かき甚兵衛が言い出したのは、自分が吾妻に与五郎を思い切らせてみせようという提言であった。

どうぞわたしがお願いひと。思ひも寄らぬひら頼みは。藪から片棒の駕籠の甚兵衛、心ありげに見えにけり。

与次「ム、すりやわり様が吾妻に意見をして、思ひ切らせうといふのか。ム、そこもある。治部右、願ひ叶へて待つ気は無いか」

治部「ハテ身どもとても尊や娘。不使さから腹も立つ。了見はしたけれど一旦武士の抜いたる刀」

甚「サアサアサアサア。その刀をこの甚兵衛に預けさしやつて下さりませ。首尾よう元の鞘へ納るやうに。働いてお目にかきよ。ひらにひらに」

とひら押しに。預ける気より預けたき心くろめる黒鞘、朱鞘。腰から抜いて投げ出し。

与次「ナア治部右」

治部「サア与次兵衛。これで暫く言分も。吾妻が返答一つに極まる。それまではまあ奥で。甚兵衛とやら頼み入る」

と。子故に言葉回り縁、親と。親とは連れて入る。

さて、この甚兵衛は何者か。彼は実は吾妻の父親であった。彼は娘に、

この甚兵衛は大坂の聚楽町に破家の一軒も持った者ぢやが。商売のあら道具。ひよんな物買ひ合して。思ひも寄らぬ誤り。所払ひにそれから散りぢり。六つの年ぢや。覚えまい。(中略)おとよも今は藤屋の吾妻というて。新町で一と言はるゝ太夫になつて。大人しうなつてみますと。聞くとそのまゝ飛んでいて逢はうとは思ふたがの。それからこのさま。よう思へば結構なべゝきた女郎に。おらがやうな雲助が親ぢやと言うたら。よい幸ひも落ちようかと遠慮は無沙汰。

と身の上を告白する。ここにもう一つの感覚(身分というよりも職分)が登場する。甚兵衛は、かつては大坂に店を構えた一廉の町人であったが、商売に失敗し、今は「雲助」に成り果てている。彼の自己認識としては、新町の遊女である娘の前に出るのも憚られるのである。この言葉を素直に受け取るなら、これは当時の人びとが「駕籠かき」＝「雲助」に対して抱いた最大公約数的な感覚ではなかったろうか。そうでなければこの芝居が成り立たない。何よりも甚兵衛自身が、そうした人びとの視線を意識し、みずからの行動を規定するのである。彼が取った行動は、娘に与五郎を思い切らせる、すなわち自己犠牲を払うという選択だった。

こうして、「武士」の行動規範をもつ治部右衛門、「商人」なりの考えをもつ与次兵衛、さらに下層の「雲助」ながら道理を説く甚兵衛と、三人の父親が出揃い、それぞれが子を思う気持ちから、さまざまな理屈を言い合う。そこが「橋本」の段の真骨頂である。

さて、甚兵衛は吾妻に与五郎を思い切らせようとするが、吾妻は吾妻で今まで世話になった与五郎をいまさら振り捨てられないと自害を図る。そこへ治部右衛門が現れ、

其元が子を思ふも。この治部が子を思ふも迷

ふ心は皆ひとつ、子ならで親は泣かぬものを、
生れる時を喜びとは、いつの世からの偽りぞ
や、コレこの刀は五郎政宗。金百枚の折紙。
地頭よりかねて御所望。身を放さぬ重宝なれ
ども、売り代なして吾妻を身請け。

と取りはからう。一方、与次兵衛は治部右衛門への
言い訳のため、頭を丸めて出家姿となり、吾妻
は与五郎の妾に、お照は本妻に立ててほしいと頼
む。

こうして

心解け合ふあひやけ同士。頭ばかりか一家中、
丸うなつてぞ見えにける。

といったんは丸く納まるのである。

この段では、さまざまな身分階層に属する三
人の父親が、それぞれの社会的立場に従い行動
し、理屈を述べている。その過程では、身分感
覚の違いが鋭く浮き彫りになる局面もある。いや結
論においてまでも、「武士」の治部右衛門は家宝
の刀を売り払うことで決着を付けようとし、「商
人」の与次兵衛は出家して家督を与五郎に譲ろう
としたごとく、彼らの行動規範は身分意識と不可
分である。そうした三人三様の父親が、しかし子
を思う一事においては共通する、それがこの「橋
本」の段の主題であるようにみえる。

おわりに

本報告では近世の身分感覚を探る観点から、
『双蝶蝶』のなかから「相撲場」と「橋本」の段
をながめてみた。おそらく、実際の上演にあつ
ては、「相撲場」においては、濡髪と放駒のそれ
ぞれの個性が魅力的に描けるかどうか、「橋本」
においては、三人三様の父親の道理と情愛とがう
まく引き出せるかどうか、が成否の鍵となろう。
それはとりもなおさず、演者も観客もともに、ど
こまで近世の身分感覚に敏感で、どこまでこれを
的確にとらえられるかが、芝居の根幹に関わっ
ているということである。

その意味では、『双蝶蝶曲輪日記』の世界は読
めば読むほど、私たちに多くの情報を提供してく
れる。この作品が作られた18世紀半ばは、ちよ
うど身分的中間層などが登場し、人びとの身分表
象への意識が高まった時代である。そうした同時
代的な「感覚」も、多分に芝居の魅力に盛り込ま
れているにちがいない。改めて歴史資料としての芸
能作品の可能性を思い知った次第である。

注

- (i) 「近世の身分感覚と芸能作品—『双蝶蝶曲輪日記』にみる」『お茶の水史学』53、2009
- (ii) 研究会の成果は、①塚田孝・吉田伸之・脇田修編『身分的周縁』（部落問題研究所、1994）、②シリーズ「近世の身分的周縁」全6巻（吉川弘文館、2000）、③シリーズ「身分的周縁と近世社会」全9巻（吉川弘文館、2006-08）として結実した。
- (iii) 『双蝶蝶』の梗概および詞章の引用は『日本古典文学全集77 浄瑠璃集』（小学館、2002）に依った。
- (iv) 高埜利彦「相撲年寄」（塚田孝編『近世の身分的周縁3 職人・親方・仲間』吉川弘文館、2000）